

平成 28 年 4 月 1 日

学長就任挨拶

—知を繋ぎ、知で繋ぎ続ける九州工業大学—

九州工業大学学長 尾家祐二

(はじめに)

国立大学法人は、平成 28 年度から第 3 期中期目標・中期計画期間が始まります。それと同じくして、この度、学長に就任することになりました。この機会に、改めまして、大学の使命および本学の役割と現状をご一緒に確認し、さらには、今後目指したい大学像について共有させて頂きたいと考えております。

(大学の使命)

まず、大学の使命は、教育基本法（平成 18 年改正）第 2 章第 7 条において「大学は、學術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」と記され、さらに「大学については、自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない。」とされています。すなわち、教育、研究およびそれらの活動、成果に基づく社会貢献を行う役割を担っています。そして、自主性を備えつつ、自らの活動を律することが求められています。また、このような活動を持続させるためには、社会の理解を得るための、情報開示を含む情報発信のための継続的な活動が必要不可欠であると考えます。

(九州工業大学が果たしてきた役割と現状)

次に、本学が果たしてきた役割の重要さと現状を改めて認識したいと思います。本学の歴史は、ご存知のように、本学の前身である明治専門学校を、実業家である安川敬一郎氏が巨額の私財を投じて設立されたことから始まります。本学は、開校から 100 年以上の間、建学の精神である「技術に堪能なる士君子」の養成の実践により 6 万人以上の工学系人材を世に送り、教育および研究力を駆使して、學術の進展につながる知の創造、産業界の競争力強化ならびに地域の発展に貢献してきました。

学部への志願者に関しては、ここ数年、前期日程は、2.4 倍でほぼ一定しており、後期日程は、平成 25 年の 6.8 倍をピークに減少傾向にありましたが、平成 26 年、平成 27 年の 2 年間は約 4.5 倍となっています。志願者の偏差値という指標においては年々向上しています。これは、受験生および保護者の皆様による本学への評価の向上の現れと理解することができます。一方で、18 歳人口が更に減少する中で、さらなる学生募集活動が重要になると考えます。大学院博士前期課程への志願者も定員を多く上回っており、志願者の要求に応え

きれない状況であり、定員の見直しが必要であると考え、検討を始めております。また、博士後期課程に関しては、全学総数で定員 67 名を満たす学生が在籍しております。博士の学位を取得するためには、もっとも高いレベルの学識を要求され、最近 3 年間の学位取得者数は、定員の 75%程度になっています（平成 24 年度～平成 26 年度）。入学者数および学位取得者数については、部局による偏りがあり、今後の改善の余地があります。

一方、出口においては、学部、大学院ともに学生の採用状況は良好であり、量、質ともに高水準を維持しています。就職率は、学部、大学院ともに 99%に達しており、大学院修了生の 60%程度が、東証一部上場企業へ就職しています。これらは、本学の教育活動およびその成果として成長した学生を、企業のみなさんが高く評価して頂いている証拠と理解することができます。

次に、研究活動においては、広い工学分野における多様な研究課題に取り組み、学術の進展に貢献するとともに、社会の発展に寄与する研究が行われています。組織的研究活動により、本学の特色ある研究をさらに強化するために、環境工学関連、航空宇宙工学関連、高信頼集積回路関連、情報通信関連、ロボティクス関連、医歯工学連携関連の重点研究センターが設置され、活発な研究活動が行われています。また、さらに新たな研究ユニットの形成を促進し、組織的研究による研究強化を促進してきました。本学の、研究活動に関しては、学术界におけるピアレビューに基づく、科学研究費の採択状況に関しては、最近 3 年間ほぼ変わらず、総額は約 5 億 5 千万円で 42～44 位（86 国立大学中）、採択件数は約 200 件程度で 50 位前後に位置しています。一方、国のプロジェクトおよび企業からの受託研究および共同研究については、昨年度の総額は 10 億円を超え、国が推進する研究への貢献および産業界の要請に対応しています。また、パワーエレクトロニクス分野および自動車の自動走行の研究等については、北九州市と連携した研究活動を行い、飯塚市と共に産学官連携による医工連携研究を推進しています。

社会のグローバル化が進展する中において、これまで教育及び研究のグローバル化を推進してきました。留学生数も徐々に増加し、36 カ国 300 名以上(平成 28 年 2 月現在)に達しています。平成 22 年度の 1.5 倍の留学生数です。また、国際交流協定校は、世界 26 カ国・地域 100 機関に達し、平成 22 年度には 70 名足らずの学生しか海外派遣を経験できませんでしたが、平成 26 年度には約 400 名、平成 27 年度は約 440 名に達し、その中には約 40 名(平成 27 年度)の海外インターンシップ生も含むような状況に一変しました。またダブルディグリープログラムによって、フランス ロレーヌ工科大学、中国 揚州大学、マレーシア プトラ大学等の学生 34 名（2 期中）が博士前期・後期課程を修了しております。英語だけで修了できる大学院コースも 2 つ設置（宇宙工学、ロボット工学）され、多くの留学生を受け入れています。そして、今年度本学にとって初めての Erasmus+プログラム（欧州における教育プログラム）が採択され、ロレーヌ工科大との間で、学生交流が始まります。Erasmus+元年になります。このように様々な指標が、急速な国際化の進展を示しています。

(本学が目指す大学像)

大学の使命を果たすために、今後も、これまでと同様に、教育及び研究を通じて、知の継承、知の創造、および知の活用による社会貢献を行い続けていきたいと考えます。

すなわち、「知を繋ぎ、知で繋ぎ続ける九州工業大学」であり続け、教育研究の多様な活動を学外の皆様にご理解して頂くために、様々な情報発信、対話および協働の機会を設け、学内外、国内外の信頼のネットワークを築き、教育研究の内容をさらに充実させます。そして、学びのため、知的創造を行うために、高校生や企業、地域の方々が訪れたいくなる開かれた大学であるとともに、大学のすべての構成員が誇りを持って働ける大学を実現したいと考えます。

(取組み方針)

上記のような大学の実現に向かって種々の取組みを行う際に、次の事柄に配慮します。すなわち、科学技術の加速度的な進歩と浸透、社会情勢の複雑化と急速な変化及びそれらに伴う大学への要請の変化を理解し、組織的に、スピード感、緊張感をもち柔軟に対応することが重要であると考えます。一方で、変化の激しい時代であるからこそ、現状および近い将来だけに囚われ過ぎず、長期的な展望のもと、将来の変化を生み出し、変化に対応するための、多様な教育および研究活動も重要であると考えます。したがって、今、この状況において、使命を果たすとともに、今だけではなく、状来を見据えた、時間軸の拡がり、ここだけではなく、異なる状況・地域・国を想像した、空間的な拡がりの中で、教育と研究の活動を捉えて、実施することが重要であると考えます。すなわち、それらのバランスに配慮しながら取組みを実行していく必要があります。

次に、学習も研究も、その活動を起こさせる源は知的探求心であり、知識もスキルも研究成果も知的探求心から得られるものです。したがって、それを強く持ち続けることができる大学であり続けたいと思います。それと同時に、学習、教育、研究活動においては、不断の振り返り(**reflection**)、すなわち自己への問いかけ、自己との対話、と他者への問いかけ、他者との対話が重要であり、そのような多様な問いかけ、対話を行うことによって、目的、使命を果たすための自律的な活動および、活動の改善が可能になります。

このような方針に従い、教育においては、グローバル社会で活躍し続けることができる高度技術者の養成を目指し、「社会と協働する教育研究のインタラクティブ化加速パッケージ」として行っている様々な教育をさらに推進します。「インタラクティブ化」することとは、より多くの多様な問いかけ、対話、相互作用を生じさせる方法で、教育研究を充実させることを目指しています。そして、そのような教育、学習によって、自律し、興味を持ち続け、挑戦する人材の育成を行います。

研究においては、多様な関心による研究活動とともに、本学の特色となる研究活動ならびに社会の要請に応える研究活動を推進し、新たな研究グループの形成も支援します。そ

して、研究者コミュニティによる相互協力、啓発を行うことを推進し、特に、国際連携および産学連携研究を強化します。そして、企業の方、外国人研究者等多様な研究開発者が集うキャンパス作りを目指し、それによる豊かな、活気あふれる研究活動を持続させます。そのため、海外研修、強い連携による国際共同研究に繋がる活動の支援、産学連携による共同研究講座設置の推進、研究コミュニティ等組織的研究活動の支援など行います。

(むすび)

九州工業大学は、これまで重要な役割を担い、それを果たしてきました。そして、今後も、学内外において情報共有、意見交換などの機会を増やし、皆さんと一緒に、知を繋げ、知で繋げ続けるキャンパスをよりよくしていきたいと思えます。